

稻垣達郎學藝文集 一

稻垣達郎學藝文集

第一

筑摩書房

稻垣達郎學藝文集 一

一九八二年一月二〇日初版第一刷発行

著 者 稻 垣 達 郎

発 行 者 布 川 角 左 衛 門

発 行 所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑 摩 書 房

電話東京(291)七六五一(営業)

東京(294)六七一一(編集)

振替東京六一四一二三

郵便番号一〇一―一九一

印刷明和印刷株式会社

製本鈴木製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

目次

近代文学の曙

明治と文学者……………	三
かわり目……………	一〇
明治の思想家——その片影——……………	一〇
近代文学の夜明け前——〈本〉の視座から——……………	一七
ある混沌——高橋由一の世界——……………	二六
〈文〉から〈文学〉へ——明治の紀行文、主として初期の一面——……………	三三
近代詩への手さぐり……………	三三
近代小説概念の形成……………	四九
近代批評の成立をめぐって……………	二〇

坪内逍遙(一)

「第一期」評価のための一、二のノート	二五
文学論・小説論の形成と展開	二七
「婦女童蒙」と「大人学者」——あるいは、受容の軌跡——	二四
『 ^{一読} 三歎当世書生氣質』の「性格」	二四
『書生氣質』発想上の「基底」——明治維新——	二五
『 ^新 磨妹と背かゞみ』をめぐって	二五
初期逍遙概要	二五
劇作への道	二六
逍遙・樗牛の〈歴史芸術〉論争	
史劇論から歴史画論争へ	二〇
歴史画論争	二〇
聯関三章	
『書生氣質』などについての雑談	二九
『牡丹燈籠』、『浮雲』、『此処やかしこ』	三三

シェークスピア翻訳文体の変遷……………三七

二葉亭四迷

『浮雲』前後——文学革命期と二葉亭四迷……………三二

『浮雲』概要 a (講演要旨)……………二六

『浮雲』概要 b……………三三

「浮雲はしがき」と「浮雲第一篇序」(講演要旨)……………三九

『浮雲』第一篇春の屋加筆説……………三九

『其面影』と『茶筌髪』……………三六

『其面影』について……………四四

『平凡』について……………

執筆前記……………三

成立過程……………三

二葉亭と優等生——二葉亭伝一箇所の修正をふくむ……………三

二葉亭の評論……………三六

二葉亭雜稿……………

近代文学の紀元あるいは成立——文体にからんでとりとめなく——……………三二

魏叔子雜談……………三六

『浮雲』の本……………三八

雨声会と二葉亭……………四〇

替り目……………四三

多頭の蛇……………四六

二葉亭四迷全集……………四七

中村光夫著『二葉亭四迷伝』……………四九

二葉亭とわたくし……………五三

内田魯庵

魯庵概観……………四九

小説家不知庵……………四九

魯庵断章

『明治の作家』について……………五〇

知識人魯庵……………五三

斎藤緑雨

斎藤緑雨……………四七

坪内逍遙(二)

逍遙とマルキシズム……………五〇

生誕百年……………五一

あとがきに代えて——〈不刊叢書〉など——……………五五

近代文学の曙

明治と文学者

徳川幕府が〈瓦解〉して、十五代將軍徳川慶喜が水戸へ退き、家達が駿府七〇万石に封ぜられた。天皇の下、一介の藩主となったわけである。旧幕臣の多くは、かれに従って駿河（静岡）へ移った。敬宇中村正直もそのひとりである。徳川の学校の学問所で教えるかたわら、瓦解直後、派遣先のイギリスから帰るにあたって英人が饒別にくれたスマイルズの『セルフ＝ヘルプ』の翻訳に着手した。

たまたま客があつて、これを詰（つ）めていった。なにゆえ「兵書」を訳さないのか、と。中村は答えた。そもそも兵が強いなら、国は治安を得られると考えなさるのか。さらに、西国の強いのは、兵によるものと考えなさるのか。全く否である。「西国ノ強ハ、人民ノ篤ク天道ヲ信ズルニ由ル。人民ノ自主ノ権有ルニ由ル。政、寛ニ、法、公ナルニ由ル」（原、漢文）のである。

中村は、さらにつづけて、ナポレオンが戦を論じた時、「徳行」の力は、「身体」の力に十倍するといったのを引き合いに出し、また、おなじ『セルフ＝ヘルプ』の著者が、国の強弱は、人民の「品行」に係るるといったのを持ち出す。「品行」を本とすると、国の「強弱」などは、本来、問題でなくなる。国とは、「人衆相合スルノ称」である。だから、人々の「品行」が正しければ、風俗が美となり、風俗が美となれば「一国協和」し、合して「一体」となる。かくて、「地球万国、当ニ学問文芸ヲ以テ相交リ、用ヲ利シ、生ヲ厚フスルノ道、互ニ相資益シ、彼

此安康、共ニ福祉ヲ受」けることになる。もはや強弱を比較し、優劣を競うことはない。「一人ノ命」は「全地球」より重いのである。従つて、「甲兵銃砲」の用などあるものか。

といつて、西国においても、まだ全く干戈をおさめることはできていない。教化がゆきわたらないからであろう。それにしても、「六合ノ際、礼教ノ盛ニシテ兵刑ノ廢」せられる日が来なければならぬ。われわれは、互いにまだそれを見るに至らないだけである。

そこで、客は、「唯々トシテ退」いた、と中村はいつている。

翻訳の対象として、中村が「兵書」を採りあげなかったのを、客が、難詰したのは、その時点において、『セルフ＝ヘルプ』を以て無用の書としたからだだが、その場合、中村が、やがて『西国立志編 原名自助論』として為上げるその本の内容をよく説明したものやら、客がすでに熟知していたものやら、そのへんのことはわからないけれども（あとの方は、事情としてあり得なかつただろうが）、この客の神経を、いちがいに固陋とばかりはいえないものがあるかもしれない。〈維新〉近くの幕末での、西欧書の翻訳が兵書の翻訳ではじまっていることは周知である。身近に迫ってきた欧米諸国にくらべて、「甲兵銃砲」がいちじるしく劣位にあったことは、日本独立の危機を実感させるのに十分であつた。彼等の対等を期待するとすれば、「兵」の急速な近代化を必須の条件と考えるのも不自然ではなかつた。啓蒙家のおのずからの課題にならざるを得ない。げんに、状況は、福澤諭吉にしても、兵器の解説書を書かしているのである。徴兵令が出るのが、『西国立志編』の三年後とあつてみれば、客の危惧も無理からぬ。

けれども、中村は、もうひとつ先をみたのである。物質面よりも、人間面をみようとした。西欧における、宗教、政治（法をふくむ）、人権についての先進社会の状況を、後進日本の鏡として対比し、さらに、「德行」「品行」の倫理面を、人間関係の平衡融和完成（それがやがて一国独立の契機となる）への基本的条件として強調している。この叙述のかぎりでは、ひどく文化的であり、楽天的であり、抽象的であつて、客もさぞかしある種のとまどいを感じた

ことだろう。それでも、「唯々」として去ったという。

中村には、福澤の典型的啓蒙家であるほどの当面性はなかった。科学面を不十分とする反面、人間面への集中があった。客への反論にもそれがみられる。中村は、『西国立志編』の翌年、ミルの『自由之理』を、ややおくれて、客への反論にも出たスマイルズの『西洋品行論』を訳出提供した。

『自由之理』は、やや高度であり過ぎ、一般の理解するには多少手間どったけれども、通俗倫理の『西国立志編』は、まさしく「人民ノ自主ノ権」ともかわりをもち、階級や身分を問わぬ人間個人の可能性をおしえた。将来を期す青少年には有力な指針となり、とりわけ失業武士には、あたかも旱天に慈雨のごときだった。やがて、人間の価値発見以上に、負の人間性の〈立身出世主義〉へつながってゆきもするのだが。

中村の客への論は、西欧精神とかなりな濃度における交渉をもつが、底をつらぬいているのは、あくまで儒学―朱子学であった。そして、大方の啓蒙家の思想へのかかわりの実態は、大なり小なり、中村に通じるものがあつた。中村のように昌平黉生えぬきの儒者はむしろ当然のこととして、徂徠の古文辞学に開眼されたものにおいてさえ、朱子学の残存をまぬがれなかった。西周などが一例であろう。こうして、最高の思想前衛であつた啓蒙家たちが、かれらの内部へどれほど洋学を培養しても、出自の根元を、根こそぎに枯らすことはあり得なかつたほどに朱子学を中心とする儒学の内在は深かつたのである。

幕府の瓦解とともに、四民は平等となつて、武士は消滅した。しかし、〈士族〉となることにおいて、身分的特権は保持され、同時に、特殊な身分意識、それがそのまま優位意識として内包され、あとまで持続された。〈平民〉とは完全に平等ではなかつたのである。

薩長中心の新政府に反逆した旧幕臣の幾人もが、キリスト教にとりついた。指導的存在になつたものも少なくない。反逆への有力な媒介であり、人間性恢復への道であつた。そして、神のしもべとなつたかれらにして、新政府に保証された士族の座に安住したし、また、一方、内村鑑三におけるような、士道にむすびつく特別の信仰形態を

うみもしたのである。

明治の作家の多くは、武士ないしは士族とかかわりがあつた。それが、生活なり精神構造なりを、時には日常生活のくまぐままでじわじわと規制した。森鷗外の家は、武を以て事えず、医Ⅱ科学ないし文化を以て事えるいわば準武士であつたが、時と事に応じて腹を切ることができるとを覚悟させられた。樋口一葉の親は農民だったが、幕府瓦解寸前に、いわゆる侍の株を買い、金銭を以て侍に転身した。こうした俄侍でも、子女にはあくまで侍の形式を以てのぞんだ。ましてや、根生ねおいの侍であつてみれば、ひときわきびしい。豊臣家にゆかりある木下氏の流れをくむ武士の家の男子であるゆえに、尚江は、母から、獄門の晒首をことさらに凝視させられた。山路愛山の家は旧幕臣で、武士のなかでも最も誇高い武士だったから、子女は飯に味噌汁をかけて食べることを、下賤なこととしていましめられた。

明治の文学者のたいていが、武士から〈士族〉への過程を通りながら、こういう家庭教育を最大公約数として育ち、さきにふれたような啓蒙諸家にみちびかれ、時にはみずから啓蒙に参加しつつ、自身を文学者として形成していったのである。高級武士を親としなかったかれらの多くは、必ずしも裕福ではなかった。けれども、親たちは子弟の新教育に不熱心ではなかった。士族となつて身分の優位性を与えられたとはいへ、さしあつての生活の実質がそれに対応しないとなれば、せめて子弟の将来に期待することに代償をもとめようとするのは自然であつた。幕末から明治初頭へかけて生れた子弟は、瓦解、維新のあと、二〇年近くたつて、とにかく成長して、それなりに洋学を吸収した明治の新しい知識人となつていた。ミルも読み、ルソーにも接し、とりわけ、一〇年代に入るとスペンサーの社会進化論に同感した。これらのなかに、前にいった、次第に形成されて来た文学者がいたのである。

もつとも、文学を本命とするものばかりではなかった。本命とはしないけれども、しかも文学、とりわけ小説にかかわりをもつものがあらわれた。自由と民権に基礎をおく民主主義的な近代政治への欲求と必要が、おのずからそれをさせたのである。近代政治にかかわりのある幾種もの西欧小説を翻訳紹介する他方で、いくつかの政治小説

の古典を生み、近代小説へのある種の飛石となった。けれども、作者は、本命をひるがえして、文学者へと転身することはせず、非文学者である世界に己を置いて悔いなかった。

ついでにいえば、明治初頭では、〈文学〉は未分化であった。ヒューマニティーにかかわりのあるものはすべて〈文学〉であり、哲学も史学も、〈文学〉の一部門だった（現代の各大学文学部の構成がその残映である）。したがって、すべての啓蒙思想家は文学者だった。福澤諭吉も、中村正直も、田口鼎軒もみな文学者だったのである。が、二〇年近くにいたって成長して来ていた知識人のなかに、審美学上の文学者としての分化がはじまっていた。ちょうど、いわゆる〈文学改良〉と対応することになる。

維新となって間もなく、新政府は、国民倫理律として、例の三条の教則を出した。江戸生き残りの戯作者仮名垣魯文らは一文を上申して、新政府の方針に忠誠を誓った。かれらは、そのなかで、みずからを、「下劣賤業」の輩と称した。〈戯作〉―小説書きは、〈婦女童蒙〉の玩具の製造者にしか値いしなかった。人をして楽しませはしたものの、しよせんは戯れのわざに過ぎず、〈大人学士〉のたずさわるべきものではなかった。しかし、本来は、そのはずはなかったし、そうであってはならなかった。西欧の先進国では、小説は、疑いもなく〈大人学士〉のいとなみであった。成長してきていた知識人のなかに、これに気づくものが出て来た。小説の価値転換がおこなわれなければならぬ。これが、〈文学改良〉上の主要課題となった。この〈文学改良〉の途上で、戯作者の「下劣賤業」と政治家によるアマチュア文業とが次第に揚棄されながら、文学上のいとなみが専門化し、独立した文化価値を保有するようになっていった。ここによりやく近代の文学者の世界がひらけてきたのである。

このかに、文章表現の媒材に急速の発展があった。鉛活字の採用が、新聞雑誌の発行を活発にし、ジャーナリズムが成長した。文学者の成長もこれと対応し、相互映発の関係となった。これを抜きにして文学者の専門化、独立化もあり得なかったのである。

明治も二〇年近くになって、新しい知識人がすでに多数生れてきていた。しかも、その世界への進出をもくろむ

「書生」が激増し、新時代の交通の担手の「車夫」の急増に比せられた（春の屋『当世書生気質』）。かれらは、「国家有為」の人物となるように期待された。ということは、明治新政府のプログラムのなかへ組入れられること、つまり、体制のなかの有効な使用人になることで、はじめて存在としての意味を保証されたのである。しかし、「自主ノ權」の何たるかを学び、精神の自由を望みながら、新しい知識人として成長してきたかれらは、すべてが有能な使用人として迎えられずとはかぎらず、誰もが「黒塗馬車」を走らせるわけにはゆかなかった。かえって、「自主ノ權」や精神の自由を解すれば解するほど、その充実をかなえてくれぬ事情が、明治新政府が進めてきた文化の近代化の反面で、すでにかなり厚い障壁となってきた。急速に進歩する文明とみえながら、もう歪みを孕んでいた。急速に進むそれだけの反作用があったのである。「文明開化」「風俗改良」のかげで、知識人は必ずしもはれやかではなかった。文学の眼がだんだんひらかれてきていた文学者に、多くの知識人の、この内面の事情が写らぬはずはなかった。これを主題としてとらえ、人間の内側へ肉薄することで、はじめて近代文学が誕生した。春の屋主人の眼はまだ濁っていたが、二葉亭四迷や鷗外漁史のは、かなりかがやいていた。

欽定憲法ができ、国会が開設された。さかんな提灯行列があった。けれども、これを以て、「無事泰平の世の中」（横山源之助）とするべく反語で批評したものもいた。これはやりきれないことだった。春の屋、二葉亭、鷗外、尾崎紅葉、幸田露伴などにつづく文学者の第二陣がようやく育ってきていたが、かれらはそういう季節へぶつかっていた。そんななかで人生を考え、芸術を考えた。いかに生きるかを思い、美を求めた。「想世界」に限定すること、はじめて生を支えることを考えたものもいた。しかし、これはなかなかむずかしい。時代の青年知識人の苦悩を、一身に引受けたかたちで、北村透谷は死ななければならなかったのである。

第一陣文学者の、士族文学者の多いなかで、尾崎紅葉はややめずらしい例外だったが、透谷の仲間、「士族」「平民」の混成グループであった。ここに、いくらかでも市民的なものの胎動があった。これがさらに一〇年近く推移を経る「謝野鉄幹・晶子」らにいたって、多少ともその色を深めることになったといえよう。

明治には、大きな対外戦争がふたつあった。二度とも戦勝国となった。とりわけ、あとの西洋の大国を相手とするものだったので、国際的な力関係は伸長したかたちになった。けれども、それがそのまま人間充実へは結びつくものではなかった。その空虚感が、〈勝利の悲哀〉ということばで表現された。あらためて、自我の確立というようなことが持ち出された。思うところをはばかることなく具象しようとした晶子らも、徹底的には、遂げることのできなかつたその獲得への企てを、もういちどやり直さなければならなかつたのである。晶子らにほぼ雁行ないしは並行した第二陣文学者の田山花袋らのいわゆる自然派の、浪漫性を内在させるといわれるゆえんである。しかし、ここでもまた〈時代閉塞〉をなげかなければならなかつた。その点では、自然派とはまた別のかたちでの時代への反逆であつたいわゆる耽美派にあつてもかわるところはなかつた。夏目漱石もそれにぶつかつた。己を遂げることのできない知識人の内部が、かれの長い間の主題となつた。かえりみると、第一陣文学者の主要主題もこれだつた。思えば長い〈閉塞〉である。

少しさかのぼって、ある時期から貧富の隔絶がはなはだしくなつた。資本主義成熟過程での当然の矛盾だつた。

自由民権の観念的であるのよりもいっそう実感的であつた。これに対処しなければならぬ。ロシアの虚無党は過激なものとして警戒されたが、社会主義の必要を説く識者も少なくなかつた。やがて、社会主義運動となり、〈時代閉塞〉のなかにあつても、〈非戦〉をとнаえ、平和を説いた。平和論では、キリスト教徒よりも徹底し、これを精神とした文学者も出た。しかし、それが拡大されず充足されないことにおいてこそ〈時代閉塞〉だつたのである。最後に、大事なことを言い添える。明治は文学者をして、新しい文体を創出させた。〈土族〉には、手持ちの表現媒体として、漢語、漢文があつた。操作の優劣は問わないとして、根の深いものだつた。文体上の平均的な安定に達したともいえる自然主義作家においても、しばしばこの残映をみる。これは負数ばかりとはいえないけれども、とにかく、口語中心を正数とする方向へ揚棄しなければならなかつた。〈言文一致〉には、原理に錯誤があるけれども、こんにちに及ぶ近代の新文体創出上の重要な契機となつたことはたしかだろう。